

音楽のこと

| 川崎 弘詔 Hiroaki Kawasaki

以前、一時期関心があり没頭していた音楽の領域（ジャズとその周辺領域）に、再度真面目に取り組んでみようと思ひ立ち、最近少しずつ探索している。

しかし、しばらくアクセスしていない間に、音楽を取り巻く環境が激変していて驚嘆した。音楽に関する情報の質と量およびそのありようが大きく変化している。

その変化はつまるところ、情報通信技術（information and communication technology：ICT）によるものなのだが、膨大な量の楽曲や動画コンテンツがデジタルで蓄積され検索でき、音楽ソフトウェアも膨大で多種多様なことができるようになってきていることだ。音楽のデータベースとソフトウェアを個人で利用できる環境が誰にでも手に入る時代になっている。

ICTは国境がないので、世界中どこでもその状況は同じだ。演奏技術や音楽的知識を獲得する際の障壁は、格段に減少している。今後は、このような環境のなかから、優れた音楽家が多数輩出してくるだろう。

私が感じた最も特筆すべき変化は、1) 動画配信サービス、2) 音楽配信サービス、3) 音楽解析ソフトウェアの3点だ。1) については、高画質・高音質の演奏および音楽素材、演奏法および音楽理論などの解説、教育動画が膨大に蓄積され、アクセス可能となっていることである。世界中の人々が、多種多様な動画を配信している。キーワードのみで欲しい情報にたどり着く。

2) によって、あらゆる分野の楽曲を手元の端末で聴くことが可能であり、自分が知らない関連する楽曲を網羅的に教えてくれる。音楽に詳しいソムリエが、いつでも膨大な楽曲のデータベースを案内してくれるようなものだ。

3) によって、今まで困難だったことが可能になっている。音程を変えずに楽曲のテンポを遅く再生する（昔は、カセットテープやレコード、CDの再生速度を工夫して変化させていた）こと、街で流れている音楽が何か探索すること、楽曲のデジタルファイルから譜面をテキスト化して出力すること、などである。

楽譜があれば、楽曲の構造やメロディの分析が瞬時にでき、そのまま演奏技術として習得可能である。楽譜のような記録がなく、ライブや演奏や記録媒体のみにより伝承されてきたジャズのような音楽にとっては、画期的である。演奏技術の習得と、演奏理論の分析のために、繰り返し再

生し、一音ずつ譜面を書きおこして練習していた時代は、過ぎようとしている。すでに、テキスト化された譜面をアップロードして蓄積するクラウドサイトまで用意されており、興味のあるジャズの楽曲の譜面を探索すれば見つかる時代になっている。

テキスト化された過去の偉大なジャズミュージシャンの演奏は、データベース化され、分析、理論化の対象となり、情報として格納される。誰でも興味のある人は、ビル・エヴァンス、ハービー・ハンコック、キース・ジャレットが音楽的に何をしていたかがわかる時代になっている。

現代のジャズは、過去の偉大なジャズミュージシャンの誰かの演奏を再現して演奏することではなく、そこから先に進むことを要求されている。もう一度、ジャズが何なのかを注意深く再定義する必要があるだろう。

ジャズの表現の意匠をわれわれは聴いている。コピーはコピーだ。過去のスタイルをイディオムとして消化し、新たな意匠で音楽表現として創造することが、現代のジャズのあるべき姿だろうが、現代のジャズミュージシャンの課題は重い。われわれは、それらに果敢に挑んでいる音楽家を聴いている。

音楽的情報が十分に満たされ豊富な現代の状況では、技術の修得は個人の資質の関与が相対的に大きくなり、個人の学習というプロセスに依存することになる。そこでは、学習の目標設定、学習方法の戦略・方法の設定、フィードバック、個人の動機の設定、同一の目標を共有する人々のコミュニティの設定が重要で、明確な方策が設定されなければ、ただ情報に振り回されるだけになってしまう。

技術や理論という概念は、再現可能であることへの希求によって成立している方策とも言い換えられるだろう。再現可能になれば、偶然の要素が減り、安定してコントロールされた音楽表現により近づく。同時に、教育という再生産も可能となる。

音楽という分野にも、多くの要素が詰まっている。以前は分野ごとの個々の事象にしか見えてなかったものが、最近は共通した部分に目が向くようになってきた。どの分野のことであれ、こころの中の作業としては、同じなのかもしれない。さまざまな事象を、技術という言葉に軽やかに置き換えてお話しされる神田橋條治先生のことを連想した。